

M H F 魔 人

第1章



私は早速行動にでた。

プロハン様、その中でもネトゲ廃人と呼ばれる方たちは
いったいどんな生活をおくっているのかを調べるために
まずは猟団内の廃人らしき人を集めて見ることにしたのだ。

猟団とは一緒に狩りに行く仲間みたいなもので

最高で60人まで1つの猟団に所属できる。

猟団員のみでできるチャットや

猟団員のみが入れる部屋などもあり、

猟団長のタイプによって、さまざまな個性あふれる猟団が存在するのだ。

私が所属している猟団は15人という中の下くらいの人数の猟団なのだが

ほとんどすべての人がアクティブ(ほぼ毎日ログインしている)で

MHF内では割とめずらしい猟団だ。

猟団チャットで

「廃人の方へインタビューをしたいので、我こそはと思う『ツワモノ』は猟団部屋に集まってください」

と流したところ、土曜日ということもあってか

団長を含めて14人全員が来てくれて嬉しかった。

クエスト中の人もきつといたのであろうが、

それを切り上げてまで私の発言につきあってくれた事実が本当に嬉しかった。

「全員来てくれてびっくりです！ちなみに皆さんはこの中で一番廃なのは誰だと思いませんか？」

「そりゃ団長でしょw」

「デュラガウア団長ですかね^^」

「団超」

「団(ry」

「デュラさんww」

「俺か？俺は廃人なのか？」

「あの毎度の入魂数は異常でしょw」

「wwwwww」

猟団は定期的に行われる狩人祭に参加することができる。

その狩人祭とは参加した猟団が紅組か蒼組のどちらかに分かれて行われるのだ。

入魂対象モンスターを倒すと「魂」がもらえ、

その「魂」の量が多い方が勝ちという簡単なルールだ

入魂できる期間は一週間なのだが、おそらく普通の人がかかなり頑張っても

せいぜい3000~5000魂くらいだろう。

私の猟団では特にノルマはなかったのだが皆かなり頑張り、また楽しんでいたので
毎回鯖別トップ10には入っていた。

その中でも団長のデュラガウアさんが8000魂を切ったところをみたことがないのは確かだった。
どうやったのかは知らないけれど2万魂以上入魂していた時もあるって
少し怖くなったくらいだ。

確かにこの方なら私の最後のインタビューの
一人目にぴったりなのかもしれない。

「私はあるとても個人的な事情がありまして、廃人さんのお話を聞きたいと思っています
リアル生活のことも聞きたいのですがデュラさんいかがでしょうか？」

「俺でよければいいよ。ただみんながいると若干話づらいな～w」

「じゃあ納品クエにでも行って話してくればイイ！」

「そそ^^いてらしあ～♪」

「miruさん団長の弱点がわかったらコッリ教えてねwあ！獵チャと個チャ間違(ry)」

そして「デュラさんはいつからMHFをやっているんですか？」
という質問から話を始めた。

彼はβ版から参加していて
それ以来雨の日も風の日も風邪の日もインフルエンザの日も
1日もかかさずにログインをしているということだ。

大学の時に初めてモンスターハンター(無印)をやった時にとてつもない衝撃をうけ、
そこからすべてのモンハンを経験している。そのモンハンのオンラインゲームが開始されるということで
なんの迷いもなく参加したとのことだった。

「今でこそ剛種も楽に倒せちゃう古龍だけど実装当初は武器もスキルも弱くって本当に苦労したよ」

当時彼は営業マンだったようだが
毎日ネットカフェに立ち寄ってMHFをプレイしていた。
気づけば1日中MHFをプレイしていて
仕事をまったくしていなかった日も数えきれないとのこと。

「おかげで古龍は倒せるようになったけれどねw」

当然仕事には支障があるので1年ほどで自主的に退職したのだった。
今は大手ファミリーレストランでアルバイトをしながら
MHFをプレイしている。

「俺がアルバイトしているところはシフト制で、必ず水曜日は休みにしてもらってる。
メンテが入ってMHFができない時間がある曜日だけど

メンテ後に新クエを誰よりも早くプレイするあの楽しさはもはややめられない！」

MHFにリアルの休みを合わせるその廃っぷりは見事なものだ。
ただ本人はそれですごく満足を得ているのでなんだか尊敬してしまう。
私も将来はそんな風になるのだろうと以前は考えていたのだが
今現在は考える必要がなくなったのが少し悲しい。
あの大量の入魂についても聞いてみたが驚くべき答えが返ってきた。

「入魂のある週(入魂祭)は多くても1日しか出勤しないよ。
そういうシフトにしてみよう。
人数が足りなくてどうしても出勤しなきゃいけないって日も
その日になって仮病を使って休んだ時もあったし。
その日出勤していた人には本当に申し訳なかったけど
おかげでその時の狩人祭は俺一人で33000魂までいったかな確か。」

小規模な猟団だと猟団全体でも33000魂は無理だろう
それを一人でやってしまうデュラさんの廃人っぷりがますます怖くなってきた。

「狩人祭」は「登録祭」「入魂祭」「褒賞祭」にわかれていて
大型アップデート直後などの特別な時以外は
ほぼ隙間なく「狩人祭」が開かれている
つまり入魂祭は3週に1週やってくるのだ

ということはデュラさんは3週に1週
出勤日数1日以下の週がやってくるということだ
一人暮らしということだがそんな状態で暮らしていけるのだろうか

「え？そんなの簡単だよ。食べなきゃいいんだよ
食べなきゃお金も減らないし、入魂もできる。
入魂しかしてなければ家賃と必要経費くらいは払えるからね
リアル餓狼ってやつだw」

私の魂とデュラさんの魂とでは気合いの入りが違うということを思い知らされた
そして申し訳ない気持ちでいっぱいになったところで
私の最初のインタビューは無事終了した

「ところで最後に聞きたいんだけどある個人的な事情ってなに？
差し支えなければ教えてほしいな
miruさんがこういうめずらしいことをするってちょっとびっくりしたから」

私は、ここまでたくさんの廃エピソード語ってくれた団長に
嘘をつくのがとても申し訳ないと思い
誰にも、もちろん団員にも絶対に言わないということを約束し、
真実を話すことにした

「そうですか、それは本当に本当に残念です。
俺は今も話したとおり皆から見れば
廃人だけど自分自身ではとても充実した日々を過ごせてる。
それがすごく幸せだと思うよ

いつまでMHFが続くかわからないけれど深く考えずに
ずっとやり続けていくんだろな～って思ってたし、今でも思ってる。

それが突然自分の意思とは関係なく
できなくなるってどんな気持ちなんだろうか想像もつかないな

ただもし自分がそうになったらおそらく何も手につかなくなるだろうね
miruさんのように話を聞いてまわろうなんて考えもつかないよ

はぁ～なんかくやしいね、
同じ志をもった仲間がいなくなっちゃうかもしれないっていうのはさ

そうそう！
俺のフレリストはね
今では真っ黒なんだけど
それでもいつかまた引退したやつらが
必ず復帰してくると信じて
削除せずにこのままにしてあるんだ

俺のフレリストにmiruさんを登録させてもらってもいいかな？」

「デュラさん……ありがとうございます……います……」